

武蔵野幕屋 日曜聖書講筵

「アベルの霊統」

——ヨハネ第一書第3章——

1957年10月6日

小池辰雄

神の言の神的権威 神がなし給うた 顧み給わざる顧み 絶信・絶愛・絶智 アベルの霊統
アベルの献げの血 キリストは無条件体 生命の御霊の法 祈り

【ヨハネ第一書3章】

1 視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と称えらる。
既に神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。2 愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、主の現れたもう時われら之に肖んことを知る。我らその真の状を見るべければなり。3 凡て主による此の希望を懐く者は、その清きがごとく己を潔くす。4 すべて罪をおこなう者は不法を行うなり、罪は即ち不法なり。5 汝らは知る、主の現れ給いしは罪を除かん為なるを。主には罪あることなし。6 おおよそ主に居る者は罪を犯さず、おおよそ罪を犯す者は未だ主を見ず、主を知らぬなり。7 若子よ、人に惑さるな、義をおこなう者は義人なり、即ち主の義なるがごとし。8 罪を行うものは悪魔より出づ、悪魔は初より罪を犯せばなり。神の子の現れ給いしは、悪魔の業を毀たん為なり。9 凡て神より生まるる者は罪を行わず、神の種、その衷に止まるに由る。彼は神より生まるる故に罪を犯すこと能わず。10 之に由りて神の子と悪魔の子とは明かなり。おおよそ義を行わぬ者および己が兄弟を愛せぬ者は神より出づるにあらず。11 われら互いに相愛すべきは汝らが初より聞きし音信なり。12 カインに效うな、彼は悪しき者より出でて己が兄弟を殺せり。何故ころしたるか、己が行為は悪しく、その兄弟の行為は正しかりしに因る。

13 兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪しむな。14 われら兄弟を愛するによりて、死より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。15 おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。16 主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。17 世の財宝をもちて兄弟の窮乏を見、反って憐憫の心を閉する者は、いかで神の愛その



衷にあらんや。18 若子よ、われら言と舌とをもて相愛することなく、行為と真実とを以てすべし。19 之に由りて我ら真理より出でしを知り、且われらの心われらを責むとも神の前に心を安んずべし。20 神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給えばなり。21 愛する者よ、我らが心みずから責むる所なくば、神に向かいて懼なし。22 且すべて求むる所を神より受くべし。是の誠命を守りて御心になう所を行えばなり。23 その誠命はこれなり、即ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給いしごとく互いに相愛すべきことなり。24 神の誠命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。我らその賜うところの御霊に由りて其の我らに居給うことを知るなり。

● 神の言の神的権威

今日はヨハネ第一書第3章の後半になっております。

10 之に由りて神の子と悪魔の子とは明かなり。おおよそ義を行わぬ者および己が兄弟を愛せぬ者は神より出づるにあらず。11 われら互いに相愛すべきは汝らが初より聞きし音信なり。12 カインに效うな、彼は悪しき者より出でて己が兄弟を殺せり。何故ころしたるか、己が行為は悪しく、その兄弟の行為は正しかりしに因る。

13 兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪しむな。14 われら兄弟を愛するによりて、死より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。15 おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。16 主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。17 世の財宝をもちて兄弟の窮乏を見、反って憐憫の心を閉ずる者は、いかで神の愛その衷にあらんや。18 若子よ、われら言と舌とをもて相愛することなく、行為と真実とを以てすべし。

この前は、

9 凡て神より生まるる者は罪を行わず、神の種、その衷に止まるに由る。彼は神より生まるる故に罪を犯すこと能わず。

という驚くべき9節を中心にお話しました。

ヨハネの言は非常に断定的、断言的です。近代人は

「何々であろう。何々であると思う」

というような言い方が多いのですが、キリスト、預言者、使徒たちの言葉は非常に断定的なんです。これは自分が想像したり、ただ願望しているのではなくて、神の言を戴き、神の生命を戴いて告白しているからです。神における権威の言ですから、キリストは、権威



ある者の如く語って、学者の如くではなかったわけです。学的良心というものは尊重しますが、福音の世界では神的権威というものがものを言っているんです。その神的権威であるところの神の言は、

「さあそれじゃ、困ったな、聖書は本当に間違いがないのだろうか？」

というわけで、聖書の聖典性、聖書のどれだけが本当のテキストで、どこが本当でないとか、所謂、^{いわゆる}原典批評が始まるわけです。或いは、

「一言一句、全部これは間違いない」

と言ってみたりします。しかし、それはまあ、おかしい話なんです。聖書の権威というのは、そんな文字づらにあるのではない。言の奥の言、^{うごひ}というものが特定の言という限界を越えて無限に響いてこなければ、私たちは、いま伝えられているところの、いろいろの誤謬^{ごびゅう}も混ざっているところの聖書が神の言であるという、その権威性がわからないわけです。そうすると、権威性をはっきりわからせるために、カトリックでは、

「^か斯く解釈すべきものである。そういう解釈に基づかない解釈をすれば、それは異端である」

といって、はつきりわくづけをする。プロテスタントでは、いろいろの解釈の仕方が教派によって出てくる。ところが、無教会というの是一向そういうものを定めてないので、各人勝手であります。しかし、その勝手が人間的主観性である間はいけません、御霊による主体性であるとき初めて実は本当の角度が出ているわけです。

実は、キリストの言も行も、量的にいつても、

「とうていこれは載せきれない」

ということをやヨハネ伝の終りに書いてあります。だから、聖書は有限の文字でありながら、質的にも量的にも無限なわけです。

「御霊の力のみが神の奥義まで知らしめる」

と、パウロが言っているのはこの角度です。聖書は私たちに真理が、神の国が来るまでいくらでも溢れて示されて行く、というような角度でものを言っているわけです。

今、私たちはこのヨハネ書を読んで、いかにもさっぱりと、物をはつきりと黒白明瞭に言っているのを見る。これは非常に大事なのでして、私たちの救いの確かさ、信仰の確かさといったようなものも、その角度でもって受けとられて行かないと、いつまでたってもダメです。

ヨハネ伝、ヨハネ書翰では、神の子と悪魔の子、愛することと憎むこと、光と暗、義と不義、生と死という、非常にその対立がはつきりしている。ヨハネ書翰は一言でいえば、愛の書翰といってもいい。そこで、今日のところで、

「われら互いに相愛すべきは汝らが初より聞きし音信なり。」

「初めより愛すべき」ということは、キリストの遺訓で、ヨハネ伝の終りの方でキリストが別れる時に、



「お前たちは互いによく愛せよ」

と言っておられる。これはキリストの遺言ですよ。ヨハネ伝15章。これも非常に似ていて、その9節に、

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ¹⁰ なんじらもしわが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。」「我これらの事を語りたるは、我が喜悦の汝らに在り、かつ汝らの喜悦の満たされん為なり。¹²わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互いに相愛せよ。」(ヨハネ15・9～12)

これがキリストの誠命です。旧約聖書も新約聖書も結局この愛の一言につきるわけです。

●神がなし給うた

¹²カインに效うな、彼は悪しき者より出でて己が兄弟を殺せり。何故ころしたるか、己が行為は悪しく、その兄弟の行為は正しかりしに因る。

カインとアベルのことが出ているんですが、アベルのことはちよつともここに言葉はでていません。私は今日ここに、「アベルの霊統」なんていう題を掲げたんですが、創世記の4章を開いてください。私は自分の訳で読みます。

「さて、人その妻エバを知る。彼女が^{かれ}孕み、カインを生んで言う、私は男の子を得た、ヤーヴェエーによつて。彼女またその弟アベル(ヘーベール)を生み、さてアベルは羊を牧う者、カインは土を耕す者であつた。日を経て後、カインは土の果の献げ物をヤーヴェエーにもたらした。アベルもまたその羊の初生と、肥えたるものの中からもたらした。ヤーヴェエーはアベルとその献げ物を顧み給うたが、カインとその献げ物とは顧み給わなかつた。そこでカインは甚だ怒り、その面を伏せた。ヤーヴェエー、カインに言い給う、『汝、なんで怒るか。なんで面を伏せるか。汝もし善を行つたならば、なんで上げ得ないか。もし善きを行わなかつたならば、罪が門戸に伏し、彼は汝を慕い、汝は彼を治めるであらう』。さてカインその弟アベルにもの言う。やがて野に彼らが居たとき、カインその弟アベルに立ちかかり、これを打ち殺してしまった。ヤーヴェエー、カインに言い給う、『汝の弟アベルは何処に居るか』。彼言う、『私は知らない。私はなんで私の弟の守者でしようか』。彼言い給う、『汝、何をなしたるや。汝の弟の血の聲が地から私に叫んでいる。今や汝は^{のろ}詛われてこの地を離れよう。この地はその口を開いて、汝の弟の血を汝の手から受けたのだから、汝、土は再び汝にその力を与えない。汝は地をさまよい、さすらう者となるだらう』と。云々」(創世記4・1～14)

人殺しという、いやな話。聖書の物語によれば最初の兄弟の兄が弟を殺してしまったと



いう、なんとも言えない悲惨な事態です。兄は耕す者である。弟は遊牧の牧者の方である。勿論、宗教史的にいうと、農耕民族と遊牧民族との対立を背景にして、この物語が発生したとグンケル〔註：Hermann Gunkel (1862～1932) ドイツの聖書学者。19世紀末の文献批判に基づく観念論的發展図式によるイスラエル宗教理解を批判し、伝承史と文学形態批判という新しい方法論を用いて、オリエント環境世界の中での個性的發展像を描こうと試みた宗教史学派の代表的学者であり、今日の「聖書学の父」といわれる〕の創世記註解などを見るわけです。

それで、遊牧の民の方の献げ物が神に喜ばれた。そこに犠牲燔祭の宗教の優越が証されているわけです。それは別として、とにかくこの記事でカインに、

「お前は悪い事をして、なんで怒るのか、お前が善い事をしたなら、頭を挙げることができないわけではないだろう。なぜ、悪い事をしたのか」

と。この記事だけではなぜ兄が悪いのかわかりませんね。兄さんも一生懸命に畠を耕し、穀物を捧げたのに、何故、弟の燔祭の方ばかり、神様は顧みて、兄の素祭の方を顧み給わないのか、というわけです。

人生においていろいろな現象を見る。そして、

「ああどうもこれは不公平である」

と、合点のゆかぬことがいくらでもあります。同じ兄弟の間でも、

「お父さんのやることはどうも少し不公平だ」

なんて子供は思う事があるかも知れない。また、

「あの先生は誰々さんには大変優しいが、誰々さんにはそうでもない」

とか、まあいろんな公平、不公平とかいうような事が現象的に見えることは、種々あるわけです。神様がなさるところの種々の、いわゆる自分の運命というものを考えて見たときに、

「どうして、私はこんなに不幸なんだ、どうしてあつちはあんなにうまく行つて

んだろう？」

といった疑問が生じてくる。どうしても人間という者は、すぐそういう比較をして、天秤^{てんびん}にかけて見たくなる。まあそういった事態に対するひとつの深い答えがこの中にあると思われる。

兄カインのした献げ物が穀物であろうと、弟アベルの献げ物が羊であろうと、その兄が本当に純一無雑な心で神に捧げたか、弟がどういう心で神に捧げたか。その捧げ物をするその心を、心の相^{すがた}を神様は見られた。そうして、まだここには分裂がある。或いは何か不純な要素が入っていた事をもって兄のカインの方を顧みられなかったのかも知れない。わからないです。またあるいは、これ〔兄〕もまことに結構です。けれども、神様は何だか知らないけれども、理由はわからないけれども、とにかくこの時は、その時に弟の献げ物を顧みられた。片一方は「顧み給わざりき」と書いてある。

「カインとその捧げものを顧み給わざりしかば」



と。これは兄カインとその捧げ物を神様は顧みなかった。その理由は、その心に在ったか、または兄の心及びその捧げた物のでき具合であつたか。そして、弟はその心が非常に自分を全的に捧げたような心で、また、きずなき羊であるといったような理由でこちらを顧みられたのかもしれない。或いはそういう事でなくて、ちよつと見には、どうしてカインが顧みられないかわからない。ということもあるかも知れない。

どっちにしろ、なし給うたところのものは、神がなし給うたんです。或時、或処においてこの神様はそうにしたという、のつぴきならい現実というものに立ち向かつて、

「自分は神様にこの時に顧みられなかった。弟は顧みられた。どうも自分を顧みて一つも悪いところはないと思うんだが、どうしたんだらう？」

ということもあるだろう。にも拘らず、

「為し給うたものは、これは神である」

といって、神の私たちに対する取り扱いというものは、こんなに努力したにも拘らず、結果は悪かった。

「何も悪い事はしたことがない、大いに良い事をしているのに何故こんなに病気がくるんだらう、何故こんなに不幸なんだらう」

いろいろなあります。そういうその人生の、どうも理由のわからないことがたくさんある。しかし、それは大きな意味において――それは人を通して或いはいろんな環境を通して、いろんな条件を通して、それが一応の原因になってもですよ――究極において、神がこれをなし給うた。神がこれを見て、これをそこに放任し給うた。とにかく、

「最後の実権を握っている者は、その運命の最後の鍵を握っている者は神である」

ということを見ているならば、一切の雲霧を貫いてそこを見ているならば、私たちは自分のこの人生のいろんな運命とか、出会いとか、そういったことに対して、他との比較はいらん。勿論、人間の目には映ります。耳にきこえてきます。人の噂もあります。様々です。けれども、そういったものをすべて乗り越えて、比較に絶して、比較というようなことに絶して、神對我ということ。そして神がなし給う、貴神の意志ということ。究極においては聖なる意志がそこにおいて隠されてある。

●顧み給わざる顧み

“No reason Why.” 「何故であるかと理由づけない」
なにゆえ

というんです。「何故かく神なし給うか」ということを理由づけない。

「神なし給うが故に、然り、アーメン！」

というかどうか。

「神、顧み給わざるが故に、然り、アーメン」

とカインが言えるかどうか。私たちはこれが言えるかどうか。



この私たち罪びとの不完全なまたあやまちだらけの存在の側に最後の理由が、良きにつけ悪しきにつけ、最後の理由がこの相対的な現実の側にあるとするならば、私はとてもやりきれない。とても不安でやりきれない。今日喜んで、明日喜べるかどうか、わからない。なんだかわからない。

もし、救いの事態が私の側の何ものであるならば、私は、救いは絶望です。神に顧みられることが、単にアベルの側にだけ懸かっているということならば、それではどうも困る。棄てられたことが、ただカインの側だけにあるならば、これも困る。

ヨブ記の中に書いてある。

「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバの聖名はほむべき哉」

という。与奪は神様の自由である。

「エホバは幸いを下し給うなり、またわざわいをも我受けざるを得ず」

という。即ち、わざわいも幸いもどっちも、究極において神様から来るんだと。だから、これはどっちにしろ、いろいろなさういつた事象を通して何を捉^{つか}まえるかが問題なんです。何を問題としているかが問題です。問題とするものは現象面でない。現象面でなくて問題とするものはその本体界、本体の面です。

だから、いろいろな現象を通してそれだけの相対的な判断はなされても、それでぐらついてはダメです。自分のやり方が悪かったか、それは大いに顧みていい。けれども、最後は何だか知らんが、神様がとにかくなし給うたのだから、この神がなし給うた事に対しては、その時いくら不公平に見えようとも、それが自分にとって最善である。神のなし給うたところなるが故に、その他の一切の理由でない。

「これ神のなし給うたところなるが故に最善である」

といって受けとることが本当の信という。これが本当の信仰です。

このところで普通の註解ではそんなことはなんとも書いてない。けれども、私たちは聖書の奥を見る。そしたら、これは権威ですよ、今度は。私は想像しているのではない。神様を立てるということを、どんなに立てたってこれは間違いない。

これは要するに、ここにおいてカインが躓^{つまず}いた。神に躓^{つまず}いた。カインは一生懸命でこれを捧げました。にもかかわらず、この時、何だか知らんが神様は顧みなかった。カインは、

「それでもいい。顧みなくともいい」

と。そして、更に祈り続けて神の前に自分をいよいよ碎けていたならば、神様はまたアベル以上に、或る時において、或る処において、祝福し給うのである。この物語のあとの方にゆくと、別な角度からカインの守りという事が書いてありますけれども。それが私たちがカインの躓^{つまず}きとして見るべきではないか、と正に受けとらざるを得ないので。

もう一つの面としては勿論ここに分裂があつたとか、全的でなかったということも考えられる。カインの在り方において、そこに一つの理由があつたということも考えていいで



しょう。けれども、もつと大事なことは、なし給う主は神であるから、その時にそつぽを向かれてもお神に信頼すること。

「汝、我を殺し給うとも、我、汝によりすぎる」

というのがヨブの信仰であつた。ヨブ記19章に書いてある。

「地獄に行つても、然りアーメンと言うのが本当の信仰だ」

とルッターも言つた。そういうわけで、幸福主義ではない。神一切、聖意、神の意志一切というんです。だから、キリストは、

「汝の聖意を成させ給え」

と。これがもう

「キリスト教とは何ぞや？」

というならば、「汝の聖意を成させ給え」の一言につきる。カインがこういう、この神の拒みに遭つたときに、「汝の聖意が成り給え」といつて、神が顧み給わないのをなお大きな顧みとして見る。顧み給わざる顧みというもの、そういうものを見ていけば、神様は、

「お前はそんなに信じているか」

とその信には驚く。

「このパンクズでもなお小犬が食べます。私はそのパンクズで結構です」

と言つたあのサマリヤの女があつたでしょ。キリストはその信に驚かれた。キリストをやり込めたです、あの女は。それは本当の信です。

私たちこの人間の関係でも、神様に在つて相手をそのように信じていくならば、私みたいな先生にも当たらないような人間を、あなた方が信じてくださるのならばいいが、その角度から信じてくださらないと私は困る。人間小池なんてものは信じられたら困る。

「ああ、先生は大したことないや」

なんて、それでは何もならんです、もう始めつから私は大したもんじゃないんですから。私には期待しないでください。私を期待するなら、

「私はどのように神様に向かつているか」

という、その気合に共鳴して戴いて、その気合でもつて、あなた方がその気合で一緒に行くなれば、どんなことがあつても、これは離れない。けれども、人間小池というものを何か期待していたら、どつかで必ず躓く。これは言っておきます。たとえ躓かなくても、それは本当の幸いでない。私たちの関係は、絶対に直接関係はダメなんです。これはキリストを通さなければダメなんです。私は教祖ではないんですからね。絶対に御免こうむります（笑）。

●絶信・絶愛・絶智

そういうわけで、カインはそれに躓いてしまった。それに躓くと、何が来るかというと、



弟と自分とを比較して、

「ああ、弟は顧みられている。俺は顧みられていない」

と。ここにサタンがすぐつけ込んで、「妬み」というやつをその中に入れる。妬みというやつ、嫉妬というやつを。そして、その嫉妬は行動となって、遂に最後の行動は人殺しという行動になる。嫉妬だとか、憎しみだとか、いまいましたとか、憎らしいだとか、というのがくる。

「兄弟を憎む者は即ち殺したるなり」

とキリストが言った通りです。人殺しは、憎しみはサタンの霊ですから。

「サタンは始めっから人殺しであり、憎しみであり、偽りである」

と、キリストがヨハネ伝8章でもっておっしゃっていらつしやる。そういったサタンのもの。サタンはもともと天使で、自分が神を僭称し、神の如くならんとした。神をさしおいて神の如くならんとする角度はダメなんです。神というもののなしに、どんなに人間が理想主義的なことをしても――理想主義的な思想は結構ですけども、実はそれはもうひとつ大きな空間の中に入ると――これは罪なんです。自己をのぼしているんですから。自己をのぼしていくことはよさそうだけれども、それはダメです。どんなにそれが崇高に見えてもダメです。これはみんな「肉」という。

パウロが「肉」といつたのはこれなんです。神の意志を立てていることを「霊」といい、神の意志の立たざることを「肉」という。もうこれははっきりしている。この一番大きな人間の在り方の区別というものは、いずこにあるかということ、聖意を立て、神の意志を立てること、

「汝のみ心を成させ給え」

というのが霊なんです。「我が心をなし行く」というのが肉なんです。だから、このペテロが大いに霊的なことをいって、「汝の上に教会を立てる」とまでキリストに言われたその次の瞬間には、

「サタンよ、退け！」

と。即ち、ペテロは地的な角度からキリストをかばおうとしたから、

「そんなことは御免だ。私はそんな意味でやって来たんじゃない」

というのが、イエスの「サタンよ退け」です。ペテロが何もサタンじゃないんだけど、ペテロがサタンと組したから、サタンの角度の魂に動きが来たから、「サタンよ退け」と言われた。

そういうわけで、このカインの角度は神の御意を立てない。そうすると心ならずも必ず憎しみというものがくる。憎しみという世界はしょっちゅう、戦争、戦争とやっている。その戦争というような究極の事態に到るところの一切の人間の根本というものは、実は人間のお互いの感情の齟齬^{そご}じゃなかった。神様との関係の破れからきている。私たち一人ひと



りが神様との関係が破れると、これはもうダメなんです。平和は来ない。これは争い、憎しみ、誤魔化し、偽り、たばかり、いろんな悪いものが出てくる。

ですから、神との関係が立つことが大事です。神との関係はどうして立てるか。神との関係を立てるにも、こつちが立っていては立たない。これが実存的な無ということなんです。自分を否定しなくては。

「自分を無私（無視）するのだよ。お前は自分を無私（無視）する人だよ」

ということをもしろ教えていると、逆説的に言ってもいいようなものです。

「神様は私を顧みない。そうだ。私は自分を顧みないはずだった」

と言ったならば大したもんです。神様に顧みられないということは、自分を無私（無視）し、自分を顧みないということです。

「己を憎まずばわが弟子となることができない」

とキリストが言われた。即ち人を愛するためには、人を愛しむためには、自分を憎まなくてはいいかん。自分を無私（無視）しなければならぬ。自分を「ナイン！」「否！」と言わなくては。だから、カインを神様が顧みられなかったという事態を自分自身に向けて、自分を顧みなくなったら、大したもんです。そうしたら、神様の顧みは、顧みざるところの神の愛が入ってくる、その次の瞬間に。即ちそのようにして、神を信じ受けとった時には、愛が入ってくるんです。

「どうしてこれを信ずるか！」

できないです、信ずるは。それは神様が私たちを徹底的に信じこんで、

「お前はダメだけれども、いいよ、どんなにダメでもいいよ」

と言って、神様が信じているという、神様がどうあつても私たちを愛していてくれるという、神からの信愛というものが受けとれるに至るまでは。その受けとるためには、いずこに根拠があるか。どこにも根拠がないですよ。

「神様の信愛というものは神にしかない。神様の信愛はただ神にのみある」

ということがわからないです、人間には。それがわかれば、キリストは十字架にかからなideよかった。それがわからないものだから、とうとうイエスは十字架にかかったんです。これが私たちにはどうしても受けとれないものだから、キリストはもう仕方がないから、

「神様の信愛というものはこんなものだ」

といって、神様の信愛を實力をもつて現わしたのがこのキリストの十字架ということ！自分を無私（無視）することができない。自分を否むことができない。神様の信というものを本当に受けとるためには、自分なんか信じていてはダメです。自分の判断や智慧なんて信じていたら、神様の驚くべきこの超越的な桁違いの信愛なんてものは受けとれやしない。何か人生に少しいろいろな経験に出つくわすと、すぐ神様の信愛を疑ってみたりする。それは自分の方の智慧だとか、信だとか、愛だとかなんてものを立てているからです。だから、



これ、自分の信とか愛とかいうものに絶、信し、絶、愛し、絶、智し、自分の智慧に絶し、自分の信に絶し、自分の愛に絶すれば、これは入ってくる。

●アベルの霊統

だから、そんな烈しい「絶」「絶する」という事態は、ただ、サイコロジカル（心理学的）なことじゃない。それは全身を投ずることだから、全身的な全行的なことである。本当の行とはそのことなんです。その本当の行は実は、キリストが来たから、このキリストの全行というものを戴くことが、これが信なんです。キリストの全き行、キリストの全存在は全き行ですから。神様に投入した全き行ですから、これを受けとることが。もうどうしてもその角度です。ただ

「こうせよ、ああせよ」

なんていって、いましめだとか、律法だとかいうことでは、いつまでたつても、これ困ります。何故、この聖書がまちまちで、そしてなかなか受けとれないかというと、パウロやヨハネがいうこの誠命だとかいう言葉にとらわれるからいかん。

「なかなかそういう誠命は守れません」

なんていって、守れやしないですよ、守ろうなんて思うから苦しくなる。いましめの奥の世界に入ってしまったて、「こうせよ、ああせよ」は、

「できるぞ、やらせるぞ、必ずできる、私はやらせてやる」

と、こう響いてくるまでは、これは受けとれない。そう響くためには、どうしたって、受けとるものを受けとらなければ。受けとる角度に自分が出て行かなくては。それはキリストなんです。

「アベルの霊統」といいました。カインはそうにして神様に、神様の顧みぎるところの顧み、顧みぎるところの神の深刻な顧みに躓いてしまった。これに始めつから及第する人は先ず一人もいない。

「義人なし一人だになし」

という。

「天皇陛下の命令だから水火も辞さない」

といって、本当に純真な気持でもって感激して行くような、日本のかつての軍人は、そういった魂でした。日本武士道というものは、その角度においては、それはものすごい魂なんです。ただそれが残念ながら、日本人には折角ある一つの魂の質は大和魂やまとに大事なものがあつただけけれども、天皇陛下が神様でなくなってしまったものだから、行きどころがなくなってしまった。馬鹿ですよ、もつと上の方を見ればいい。もつと上を、はるかな超絶の世界を見ればいい。「上」というのは、ただの空間ではダメですよ。霊的空間を見れば、創造主が、創り主が在り給う。この絶対者につき抜けてしまったならば、日本の誤魔化し



のない軍人だったら、一番素晴らしい信仰に入る。

だから、ヒルティが向こうの軍人の中には素晴らしいクリスチャンがいるといった。あのジェネラル・ゴルドンなんか大好きだったわけです。ゴルドン將軍というのは、本当に人らしい人でした。そういう、この神様につき抜ける。日本人は実にいい素質を持った民族です。大和民族というのは正直、なかなかいい素質をもっているんですが、その大事な最後のところにみんな、

「そこだけは御免こうむります。福音だけは御免こうむります」

と言う、今の青年も。何々主義、何々思想、みなたくさんいろんなものを受けとるけれども福音だけは――福音のことも、あるところまで聞くことは嬉しがっているけれども――自分がそこへ入ろうと、つき抜けようとはしない。

皆さん、クリスチャンといたら、いい加減なクリスチャンはもう止めた方がいいですよ。それよりか、普通の人の方がいいくらいです。クリスチャンという言葉は水割ってはいけない。キリストのものです。自分のものではない。キリストの有^もというのが、「油そそがれたる者」というのがクリスチャンです。「キリストス」というのは。油そそがれたる者、「聖霊を注がれたる者」という。またキリストの属^もをキリスト者という。

●アベルの献げの血

カインが躓いてとうとうアベルを殺すなんていう深刻な躓きをした。けれども、このカイン、アベルの悲惨な創世記4章の記事から、私たちがこの顧みられざるところの神の深刻な顧みというものにぶつかって、そこに絶^い信^のの信を受けとっていくならば、神様はどんなことをしても私を棄てない、どんなことがあっても愛し給う。この愛にぶつかる時には、自分の側なんか見ていて、そんな愛にはぶつかれない。ああ、それはぶつかれないです。

そうしたら、このカインの躓きを私たちは乗り越える。聖書の記事はどんな悲惨な事実、詩篇51篇のようなダビデの事態におきましても、そのかげには驚くべき福音が隠されている。

汝の弟アベルは何処にありや。ああその血は地から叫んでいる。その兄弟は何処に居るや。その血は叫んでいる。世界の歴史は五千年、あるいは六千年、どれ位の多くの人たちの血が叫んでいるか、涙がわからないか。だから、黙示録に書いてある。

「すべての悲しみと涙はこの時に拭われる」

と書いてある。その涙がかわず、血が叫んでいる。これがこの人類の歴史を色染めている。レンブランドの光と闇みたいに、光の方が少ない。闇の方が強い。けれども、この強い深刻な闇に、光がそれでも打ち勝っていく。あの何か余韻のある描き方には打たれます。量的には光が少ないんだけど、それが闇に勝とうとしている。勝ち行く姿です。

そういうアベルの血。アベルはそこで、兄貴と問答もしなければ、争ったとも書いてな



ければ、何とも書いてない。いとも簡単にやつつけられてしまっている。

「その弟アベルに立ちかかりてこれを殺せり」

と。なんと聖書は不思議なものでしょうね。簡単な記事です。

「神様は私の捧げものは顧みてくださったが、兄さんの方は顧みなかった。兄さんが怒るのもそれは無理はない。そうか、私を殺す？ いいです」

と、黙ってアベルは兄貴に殺されたかも知れない。何か知らんけれども、何にも書いてないところに、私は何か限らない何かを感じる。このアベルという人物の柔和さを。

「柔和なる者は幸福なり、その人は地をつがん」

地で倒れていった者、地において、不当な圧迫を受けた人たち、すべてそれらの者たちが地をつぐ。最後の神の新天地をつぎます。だから、黙示録の終りの方にも、今までのいばつていた権勢ある者たちはみな、神の裁きに会って、あわてふためいて、山のかげに隠れようとしたけれども、山が崩れ落ちてこれはみなダメになってしまった。

イザヤ書53章、屠り場にひかれて行く羊の如く、その声を出さず、弁解をしない。キリストが全くそうでした。このアベルは即ち、羔を捧げたことは彼自身が即ち正に羔であった。私たちはいろいろなことを企て、望み、やり、人生のさまざまなことを致します。これはみな神様への献げです。私たちの営む仕事は全部これは、捧げという。

まあここも、会費はやめて献金にしたのもそういった気持ちもあります。額はいいです。しかし、その献げるところに全身を、自分を投じなくてはダメです。そこに分裂があったらダメ。その時、自分が本当に真心をもつて捧げる在り方が、何をするんでも捧げです。

昨日は、この庭を、三人の姉妹がやって来て、家内も一緒でしたけれども、家中のいろんな片づけを、庭の草とりまで、道路に至るまで、全部やってくださった。これはやっぱり捧げの姿です。私たちの捧げというのは、どうして気持よく捧げるか。それは自分自身が神様に捧げられていなければできない。

即ち、アベルという者が本当に自分を神様に捧げている。羔を捧げた。己を捧げて、物と我とは一如です。この羔と我とは一如になって神に捧げものをした。これが神様に喜ばれた、この捧げは。この一如の捧げ、全的な捧げ。私たちの魂が神に捧げられていないで、どんなに良いことをしたって、それは決して究極において、いいことではない。

カントが道徳哲学で、

「本当にそれが良心から発しているものでなければ、どんなにそれが素晴らしいこと

であつても、道徳的に善とはいえない」

と言った。本当に良心から発しているならば、どんなにその結果がみじめであつても、それは道徳的行為であるというんです。やっぱりカントの哲学は、このキリスト教の信仰から発している。カント哲学は、ただカントを研究したって出てこない。聖書を読まなければ、カントがどうしてあんな哲学を、道徳哲学を言えたかわからない。だから、今、日本では



おかしいですよ。哲学者がいくらカントを研究しても、福音に來ないでカントを知ろうとしたってダメですよ。同じく芸術の世界でも何の世界でも、みんなそうです。よつてきたところのもの、

「その人の魂が何によつて動いていたか」

ということをつきとめないで、ただ外側のバッハの、ベートーヴェンのとやつてみたつて、レンブランドの、ラファエルの、ゴッホのとやつてみたつて、これはダメです。こちらの偉大な僧侶の画だつてみなその通りです。

昨日も私は学校でつい脱線しちゃつて、時間を突破してしまつた。けれども、生徒はやつぱりちよつと驚いたもんだから、騒がなかつた。時間突破しちゃつても。

「君たちがせつかく新しい日本というならば、何故、こういうところにつき抜けな

いか」

と、私は時々教壇から叫んでしまふ。正直、止むにやまれずして。

その献げです。アベルはカインに殺された、黙つて。何にも書いてない。カインに殺される。捧げる。けれども、それは大きな大きな罪です。それはあるべからざることなんです。アベルの血は叫んでいる。しかし、その血は、アベルの血よりも更に素晴らしい血が叫ぶ。それは「彼らの罪をゆるせ」という、叫びであります。

「彼ら為すところを知らず、それを赦し給え」

という叫びだ。これが屠^{ほふ}られながら、相手を救い上げていくところの、このアベルをもつて始まつたところのこの献げの血は、キリストにおいて最も明かに現れている。第一、最初の殉教者ステパノはそうです。この間、清瀬でお話しました。もう話になんかなりはない。私は解説なんか嫌いです。ステパノにただ感激するだけです。

そういうカインとアベルにおいて、実は人類は滅びるか救われるかどつちかの相^{すがた}が、創世記4章にちゃんと出ている。

「信とは何ぞや、贖いとは何ぞや」

という相が生まれている。それが憎しみ、いつくしみ、愛、憎愛というけれども、もとをただせば神との関係である。

しかも自分は神を信ずることができない。愛することができない。実に神が私を愛し、私を信じてくださるから、どんなことがあつても、

「私がお前の中に入つてやるんだから」

と言つてくださるから、それは有難いです。それで私たちは本当に安らかになる。本当に平安を与えられる。本当に力を与えられる。私たちの側に何ものも期待することができないし、期待しなくていいんだから。いいどころじゃない。いよいよ自分を否定して、己を憎み、己を捨てて、己を否んで、乗り越えて行く。

「十字架を負う」



とはそのことです。何か苦難を負うことも、それは十字架を負うことの一面ではありますけれども、本当に十字架を負うとは、己を棄てて行くということです。己を憎んで、己を棄てて行くということが、十字架を負うということです。それだから、しょっちゅう、十字架の下に倒れながら起き上がって行くんです。倒れながら起き上がって行く。あそこにダルマさんの「七転び八起きこころ」と書いてあるけれども、七転び八起きして進んで行くんです。

●キリストは無条件体

それで、今のヨハネ書翰の3章16節、

16 主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。

これは不思議な句で、ヨハネ伝3章16節と実に相呼応する。

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」(ヨハネ3・16)

ヨハネ3章16節には、

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり」

とある。ヨハネ書翰では盛んに、

「兄弟を愛せよ」

と書いてある。「兄弟」というのは信仰の兄弟姉妹のことです。信仰の兄弟姉妹でありながら、なお、「誰々さんがどうのこうの」なんて言ったら、もうそれはしょうがない。これは、キリストが頭で、みんなは体からだだということだから。ゲーテも言っている。

「有機体が完全であればあるほど、その各部分はみんな違う」

という。あの何ていうんだい、あれは節足動物とか何とかいうのかな、あんなのはどこで切ってもみんな生きていますがね、みんな同じように。人間はそんな節足動物じゃない。有機体は完全であればあるほど、いよいよその各部分、個体は違う。みんな一人ひとり違う。決して類型でない。かけがえのない一人ひとりです。そういう兄弟姉妹は互いに愛せなければ、渾然と有機体をなさない。ところが、

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり」

と。この「世」というのは勿論、罪の世のことです。

「世を愛すれば、神を愛する愛はない」

なんてヨハネは言ってますけれども、終りの方で。神をそっちのけにして、世なんか愛したらそれはダメです。けれども、神の愛が本当に入ってくれば、神はこの世を愛し給うた。私たちだって世なんだから。いくらクリスチャンだってこれは世で、「私は世でない」なんて言っちゃって、それはダメです。私たちは世の一人です。

「自分たちは少し特殊な、霊的特権階級だ」



と思つたら、それはとんでもない霊的傲慢です。私たちも同じく世であります。普通のこの世の中から選ばれたので、兄弟姉妹というわけですけれども。しかし、世を愛するとは、世を世にあらざるものに変えていくという意味において世を愛するんです。所謂「アガパオー」というものです。神様はこの世を愛す。私は神に叛^{そむ}いてる世の一人である。世の子である。その世の子である私を、神様は独子を賜うほどに愛してくださった。

「愛すべからざるものを愛す」

なんていう言葉がありますが、あの「べからず」という言葉がちよつと余り感心できませんけれども。愛するに価しないところのもの、それ自体は、私たちは神様の愛には価しない、罪びとですから。その価しないところの、愛し甲斐のない私たちを愛してください、いるんですから、神様の愛というのは。それに気づくだけです、信仰というのは。そんな価しないものを神様は「それでも良し」といつて愛しててくださいっている。

「それでも、なお私はダメです」

なんて、いくら逃げたつて、

「それでも、私はお前を愛するよ」

とね。神様の方の「それでも」の方が強いんです、私たちのいい加減な「それでも」なんていつて遠慮するよりか。そんな遠慮は本当の謙遜ではない。本当の謙遜は、

「もう仕方がありません」

といつて、そこに尻もちをつくだけです。そこに「もう仕方がありません」といつて尻もちついた姿は、これが本当の謙遜、本当の砕けです。

「もうどうにもなりません、一步も動けません」

というように、神様をつかまえるという、不思議な力が入ってくる。不思議な力が入ってきて、私たちは起き上がれる。それが神の愛です。神様は観念ではないですから、驚くべきキリストという実体が、

「我らの内に幕屋をはって入って来た」

と。ヨハネ伝の始めの方に書いてある。それが即ち、キリストという愛。だから、どうにもならない私たちを神様は無条件に愛している。ここに「無条件」と書いた方がいい。

「それ神はその独子を賜うほどに（無条件に）世を愛し給えり」

と。しかも世の中の一人、私たち一人ひとりを無条件に愛し給えり。「何か条件がなければ、私はお前を愛せない」というんじゃない。

「私は無条件に、お前を絶対無条件に愛す」

という。

すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得たためなり。」（ヨハネ 3・16）

即ち、神様が無条件に愛するというその無条件性の保証は何か。キリストです。無条件



とは何か。神の無条件とはナザレのイエス・キリスト、これが神の無条件の現れなんです。キリストは、何か条件をもつて私たちはこれを受けとるんですか、それだったらダメです。福音書に、新約聖書に、全聖書に証せられているところのキリストは、無条件体である。絶対恩寵といっているのはそのことです。絶対恩寵が来ているんだから。そのように愛し抜いて、それは私たちを救いへ、救いへと神様が信じ抜いているからです。

「およそこと望み、およそこと信じ、およそこと耐うるなり」

というのが、神の愛なんです。およそこと信じぬき、およそこと耐えぬき、およそこと包みぬいて行くのが、この神のキリストにおける愛です。だから、当然、永遠の生命がやってくる。永遠の生命即ち、私たちはキリストと同質の永遠の生命体とされる。神のスペルマ、神の種、聖霊が、キリストと同じ霊が、霊の生命が入ってくる。

信仰というものはなんて楽しいんでしょう。皆さん、なんか信仰がつかいうちはダメですよ。

「私はどうもまだ信仰が……」

なんて言っているから、まだ信仰を私^{わたくし}しているからさ。信仰を私しないでくださいよ。信仰とは神の信であり、愛とは神の愛である。いや実にキリストという信であり、キリストという愛である。だから、亡びずして永遠の生命がやってきて、この永遠の生命は神の栄光の現れんためであって、私たちの御利益のためではない。私たちは、永遠の生命は神の栄光の現れとして受けとっている。

皆さん、話を聞きながら、頭で聞いてませんね。その生命が来ているんです。

「今日は出てきた時は、どうも変だったけれども、今は全身すっかり楽になった」というなら、その人は本当に聞いている人です。

「だんだん苦しくなった」

なんてのはダメです。私があなた方にいましめを言ったり、何か要求したりしているんだったら、それは苦しい。ところが、神様はいくら命令しても、いましめを言っても、要求しても、みんな実力を与えてくださるから、その実力の裏づけのもとに言っている。

「先生はあんなことを言ってるけど、本当かな？」

じゃない。本当にそれを受けとって戴かないと、聖書はいつまでたっても読めない。

●生命の御霊の法

16 主は我らの為に生命を捨てたまえり、

この「生命」は「プシュヘー」です。そして、本当の生命「ゾーエー」を与える。

之によりて愛ということを知りたり、

という。へブル書10章19節はまた大事です。

「¹⁹然れば兄弟よ、我らイエスの血により、²⁰その肉体たる幔^{まき}を経て我らに開



き給える新しき活ける路より憚らずして至聖所に入ることを得、」(ヘブル
10・19、20)

なんてまあ素晴らしい言でしょうか。神学じゃないですよ、これは霊の世界の現実をそのまま告白している。自分が本当にキリストの十字架と偕に破られて、自分という殻が脱穀されて、その中にキリストの生命が、この血が、霊の血が、このアベルの霊統であるところの最後のキリストの霊の血が入ってきて、「新しき活路」がある。活ける路、活路があるから、憚らずして神の至聖所——それは天界に在り、またわが五体の内にあり——この至聖所の中に入る。私たちの中に、この私たちは聖霊の宮ですから、私たちの中にこの神の至聖所、キリストの御霊の至聖所が宿る。これは信の事態であり、救いの事態です。だから、確かだというんです。

私たちの信仰が何になるか。キリストが開いてくださらないで何になるか。そこで豁然として、これは祈りの世界で自分を投げ出すのでなければダメです。人間の魂は、体裁ではどうにもならないということは本当に有難いことです。体裁で誤魔化しているような信仰でどうにかなるなら、それはもう聖書の世界じゃない。

嵐が来ても、何が来ても、消えないところの霊の灯は永遠の灯です。カトリックではしょっちゅう——あのカトリックでもユダヤ教でもそうだ——祭壇に灯火をともし、これを消えないようにして置く。また祈りはいつも絶えないようにしておく、次から次へと祈りをもつて。しかしながら、私たちの切り開かれる、我らの五体の中の至聖所における、キリストの霊の炎は、どんなことがあっても消えません。そういう血が、本当の霊の血が輸血されたんですから。

「人によるにあらず、人の願いによるにあらず」

キリストの本願によって、キリストの具体的な、

「我らの為に生命を捨て給えり」

ということによって。「我らの為に」は先ず「我が為に」と読まなければダメですよ。だから、ヨハネ書の今のところの、「主は我らの為に」は「主はわが為に」と読む。

「我が為に生命を捨て給えり、これによりて愛を受けとりたり」

「知りたり」というのは「受けとった」というんです。ただ、頭で知ったんじゃない。これによって私たちは愛を確と受けとった。「わが為に捨て給えり」という、これによって愛を受けとった。

我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。

「捨つべきなり」は「捨てざるを得ず」です。真の生命を持っている者は、生命を捨てつついのち生命しているんです。生命を与えつつでなければ、本当の生命しているという相ではない。

「生命を惜しむ者はこれを失い、これをわがために失う者は、これを得ん」

というのは、正にそのことなんです。



泉は淀んでいない。常に流れ溢れて、その地をうるおしつつ、滾々とあとからあとから泉していく。キリストの生命は無限の生命ですから、私たちの中で淀んでなんかいない。私たちが即ち——小池じゃない——小泉です。小池は小泉となります。泉している。「小池辰雄」だなんて、一番悪い名前です。淀んだり（小池）、またサタンが棲んだり（辰雄）してね（笑）。しかし、小泉している、泉して行くんです。だから、サタンも変貌する。私は一番悪い名前を戴いたから有難い。これ以上悪くなりようがないからね。それから、

「己を憎め」

とキリストが言われたが、正に己を憎むべき名前ですからね、これ。だから、キリストの愛が入ってくる（笑）。

我らもまた兄弟のために生命を捨てざるを得ず、生命を捨てつつ真にキリストの生命が現れていく。絶対に死にません。死んでも死なない。これはキリストの栄光が、愛が現れている姿なんだ。ですから、これはもう本当に楽なんです。皆さん、聖書がらくらくに読めますよ。かたつ苦しう読んじやダメです。

「ヨハネもパウロも、まだちよつと言ひ足りませんでしたね」

くらいの気持でもって、その奥を読んでいかなくちや。それは、ヨハネやパウロも喜んでる、「そうだ、そうだ」と。

17世の財宝^{たから}をもちて兄弟の窮乏^{ともしぎ}を見、……

ま、そんなところ、いちいちやるのはよしでしょう。時間もきましたから。一番終りの、

24神の誠命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。

困るですね、「誠命を守る」というと、何か命題を守るように聞こえるから。

「そんなことを言つて、神様はうちに居るだろうか」

というわけです。だから、ヨハネやパウロが言っている誠命という言葉はいわゆる頭で、観念で言っているのではないということがよくわかるわけです。

我らその賜うところの御霊に由りて其の我らに居給うことを知るなり。

誠命は何かというと、はつきり言っておきますよ。この間の「言い逆らいの徴」（註：『曠野の愛』誌26号、1956年秋冬季合併号「言い逆らいの徴」の中でも私は書いておきましたけれども、この誠命という言葉は「御霊の法^{のり}」と見たらいい。聖霊の法です。霊法です。律法ではない。律法的な誠命じゃない。律じゃないんです。これはパウロがロマ書8章で言っている。「生命の御霊の法^{のり}」とは素晴らしい言ですね。

「キリスト・イエスに在る生命^{いのち}の御霊^{みたま}の法^{のり}は汝を、罪と死との法より解き放ちたればなり」（ロマ8・2）

キリストに在る御霊の法は、

「霊法の中に自分がつかってしまっていると、罪と死の法から解放されてあるから罪を犯すことができない」



と言っているんです、パウロもヨハネも。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は、罪に定めらるることなし」

現実には、私たちにはズレがある。ズレがあるけれども、ズレの奥の方にズレのない世界があつて、いつもそれが私たちを救い上げて勝つて行くということを、真に体受しているか!? というんです。自分でもつてそのズレをぬかそうなんて、いくら百年たつたつてダメです。そんなズレは、ズレなんか苦にしなくていいから、ズレのない世界をしつかりとつかまえて行きなさいと。

それから、あなた方の中には、たくさん体の弱い人もある。今はこういう状態で、明日はこういう状態で、いろいろな波を打つ。けれども、波の底には静かな、波の打たない層がある。このズレのないところにおいて、

「私はキリストにおいて既に癒されてある」

というものを本当に受けとつているか。

この永遠の生命がなかったならば、私たちの実存、信仰なんていったつて、そんな信仰は信ではない。これは自分の信じゃないんだから、この世界は。この信はみなキリストの信なんだから。キリストの信が入つて、キリストの愛が入つて、キリストの生命が入つて、いる世界ですから。これを受けとつて、そこに即ちパウロやヨハネが何故断定してものを言っているかという、その相が^{すがた}ここにある。

「生命の御霊の法は罪と死との法より解放^{ときばな}ちたればなり」

「既にキリストが解き放つていているというのに、何を人間的な判断で自分の信仰なんていうものを見て、そうでないようなことを言うか!」

というのが、さつきから申し上げている絶対恩寵の中に受けとつていく世界なのです。そういうことを人間的な判断で言っている中はダメなんです。

「我らその賜うところの御霊に由りて」

と。これは私たちが、何故それが告白できるかという証拠は正に聖霊にある! 御霊にあるのであつて、私たちの側のただ絶望とか、ただ信仰とか言っているのではない。キリスト者とはこの「御霊の法」^{のり}を、聖霊を宿^{あぶら}している者、膏注^{あぶら}がれたる者という意味です。

そうなつたらば、皆さん、このキリストの死んでも死なない素晴らしい生命は、愛は、光は、これは何とかして、くすぶっている人に、困っている人に、苦しんでいる人に、与えないではいられないじゃないですか。

「兄弟のために生命を捨てる」

という角度で毎日を生きている。そのような角度の生き方ができてるわけです。与えることによつて、いよいよ自分はキリストの生命で豊かに溢れてくる。井戸は汲まないでいればダメになる。井戸は、汲み上げていくと^{こんこん}滾々と、常に水が湧いてきます。

では、今日はそこまでにします。



● 祈り

限りなき生命と光と愛との神様。主イエス・キリストにおいて、一切を現わしてくださった神様。私たちにこの驚くべき恩恵の生命をくださった神様。

カイン的な私たち人類にも拘らず私たちをキリストに在って、アベルの末裔と変えてくださって感謝致します。

お父様、いよいよこのアベルとなりまして、アベルの霊統を嗣ぎまして、このカイン的な世の中に対して、真にキリストの生命を与え、また与えて行くことにおいて、日本をまた世界を、生命の世界に、喜びの世界に、真に平和の世界に、歓喜の世界に入れる一人ひとりの器となし給わんことを願います。人生これより愉快なことではなく、これ以上の使命はありません。

お父様、私たちの心は定まり、感謝いたします。どうか、クリスチャンというならば、この悲願を、この霊願を、それぞれのつびきならない仕事を通して、十全に仕事と我と一つになって、全部あなたへの献供として、進ましめ給わんことを願います。

神様、誠に嬉しくあります。どうか、兄弟姉妹たち、数は少なくあっても、絶対に質的に金剛石（ダイヤモンド）となしてください。そして、本当に世界にあなたの光を放たしめてくださるようお願い奉ります。斯くして、この日本の国はこのようなクリスチャンによって次から次へと、御霊の灯をともしび、霊統は即ち万里の涯まで、掩われざるを得ないのであります。どうか、そのように、奮い立たしめ給わんことを切に願います。

今日は午後から、野中武君と海老原恒子さんの結婚のことがあります。その最後の集会において、キリストの十字架・復活の驚くべき愛のおとずれにぶつかり、神様、感謝いたします。どうか、勇み勇んで、北の涯〔北海道〕において証し人として立たしめ給わんことを願います。

また、兄弟姉妹たちみな、それぞれ、同じようないろいろな、のつびきならない将来が待っています。どうか、その兄弟姉妹たちをそれぞれの、のつびきならない一人ひとりの将来において、どのような運命に立ち至りましょうとも、絶対不敗、キリストにおける証人として、神様、立たしめ給わんことを願います。然らば、人は、どのようなことになりまして、勝利であり、また成功であります。然らずんば、どのような成功を見ましても、これは失敗であり、亡びであります。カイン的になるか、アベル的になるか、この創世記4章において分かれたる人間の在り方。ここにおいて、本当に人類は、救いに行くか、亡びに行くかに分かれたれ、示されておりました。驚くべき聖書は啓示であります。

お父様、どうかこの20世紀は、カインの末裔の跋扈において亡びることなく、このアベルの贖罪をもつて、これを救い上げていくことができますように、クリスチャンの自覚をして真にキリストに在る自覚たらしめ給わんことを願います。

今、心からの感謝と願い、聖名によりて捧げ奉ります。アーメン。

